現代のマクロ経済学

蔵 研也
Kenya Kura

ルーカスとその還元主義的方法論をめぐって

発行　日本図書刊行会
発売　近代文芸社

第一章　現代のマクロ経済学――7
第二章　現代マクロ経済学のミクロ的基礎――15
第三章　ケインズ経済学――41
第四章　ルーカスの批判――65
第五章　ラムゼイモデル――75
第六章　合理的期待形成仮説――89
第七章　ロバート・ルーカス――113

第八章　経済変動の理論 ―― 129
第九章　経済成長の理論 ―― 163
第十章　貨幣と実物経済 ―― 181
第十一章　ニューケインジアンの経済学 ―― 193
第十二章　内生的経済変動の理論 ―― 209
第十三章　重複世代モデル ―― 239
第十四章　還元主義と社会科学 ―― 265

現代のマクロ経済学

――ルーカスとその還元主義的方法論をめぐって

第一章

現代のマクロ経済学

現代マクロ経済学とは何か

そもそもこのエッセイは「現代」マクロ経済学についてのものなのだが、まず第一にその定義について簡単に説明することにしたい。「現代」と銘打つからにはそれ以前のものとの間には違いが存在する必要がある。もちろん歴史学者に聞くまでもなく、ほとんどの社会現象はそもそも連続的なものだ。にもかかわらず相対的に何らかの変化が大きいと認識される時点において作為的に何らかの不連続を見出して、作為的に時間の流れを分割するのが歴史学というものだ。

幸いなことに、マクロ経済学という学問については方法論的なレベルで不連続がはっきりしており、「現代」マクロ経済学という言葉の用法については、経済学者達の間では大きな異論がない。一般的な教科書に書いてあるところではマクロ経済学は「経済変動、失業、インフレーション、経済成長などのマクロ的（巨視的）経済現象に関する学問的探求」と定義されている。この定義、または研究対象に変化が生じたわけではないが、それらの経済現象を考察す

る方法は大きく変化した。

それは七〇年代にシカゴ大学のロバート・ルーカスの一連の論文に始まり、八〇年代に入って完全に一般化した方法であり、現在ハーバード大学の教授であるロバート・バローの命名によって、一般的には「均衡動学アプローチ」と呼ばれている。なぜそう呼ばれるのかは、これから解説してゆくが、重要なのはこの研究方法が今も市井の議論に持ち出されることの多いケインズ経済の方法とは大きく異なっているという点である。またほとんどの非学術経済学者達にはまったく理解されていないため、現状では一般的知識人がその研究成果を知ることもほとんどない。このエッセイはこの均衡動学マクロ経済学の方法論的な解説（と同時にある程度の批判）と、その結果として得られた経済分析の主要な結論や論争点を取り扱っている。

ミクロに基づいたマクロ経済学

社会現象を説明する際に経済学がとる方法は、端的にいって還元主義と演繹主義だ。たとえば、現代の経済学は人口の変化という社会現象についての理論を盛んに構築してきているが、

この問題については歴史学者、または社会学者の方がより古くから分析をおこなってきたのはいうまでもない。けれども決定的に異なっているのは分析の方法論である。

歴史学はとくに理論を必要としないという説も有力だ。また、社会学ではそもそも社会には文化というものが存在し、それがその社会に属する個人を規定していると考えるのが通例だ。これは社会学の始祖デュルケムに典型的に見られる発想である。

これに対して経済学は、「社会現象とはすなわち個人の行動の集合に他ならない」という還元主義的命題から出発する。文化とは一連の個体の行動様式の集合に付与された呼称であり、そうである以上は個人の意思決定についての仮定から演繹的に社会現象、さらに文化を導出する必要があると考える。

ここでこの違いを前述の人口に関する理論、とくに発展途上国において普遍的に観察される多産について適用してみよう。社会学においては、前近代的社会には多産を勧めるような文化がそもそも存在し、それが個々の女性の行動を規定することによって多産が価値であると信じつつ、出産育児に励むことになると考える。そして工業化に伴う出生率の変化は、工業化という社会現象がもたらす文化、または社会規範の変化によって説明される。

これに対して経済学では個人の合理的な選択から理論を構築する。経済学における一つの有力な説明によれば、発展途上国の貧しく、金融機関の未発達な環境下においては、各夫婦また

は女性はより多くの子供を生むことによって自分の老後の面倒を見てくれることを期待する。けれども社会が発展するに従ってより所得が上昇し、銀行や証券などを通じての貯蓄の可能性が高まるために、老後の面倒を子供に頼る必要はなくなる。そのために子供を経済的な資源としてではなく、むしろ純粋な愛情の対象とするようになり、そのために出生率は下がるのだという。

このように経済学においては、文化も個人の合理的な行動の結果から演繹されなくてはならない。もちろんそこでは他個体との交渉関係を考察するゲーム理論を使ってもかまわないし、また、そうしなければ多くの人間行動は理解不可能となる。けれども、その場合にも、やはり文化、または一連の社会現象は、各個人の行動の集合として導かれなくてはならないと考えるのだ。

そもそもこの還元主義とは、全体はそれを部分に分解することによって理解することができるという考えであり、古くはデモクリトスなどの古代ギリシャの自然哲学にも遠源を見出すことができる。この「部分の性質から全体について理解する」という考えは人間の理知的思考と非常に親和的なものなのであり、さらに近代の自然科学はこの還元主義を押し進めることによって進歩してきた。

これに対して社会科学の一分野である経済学において、完全に還元主義的な考え方が支配的

となったのはそれほど古いことではない。全体は部分に還元されるべきだという考えは常に経済学の発展を前進させてきたものの、はっきりと明示的に示されたのは七〇年代以降だ。ケインズによって確立されたといわれるマクロ経済学は、その方法において厳密には還元主義的ではなかったからだ。

このような理由から、現代マクロ経済学というとき、それは社会全体の経済現象を個人の行動に還元して説明しようとする試みであると定義することができる。前に現代マクロ経済学とは均衡動学という分析手法を使うものであるという説明をしたが、均衡動学以外の方法では現在のところマクロ経済現象の還元主義的な説明をすることは不可能なために、実際にはこれらは一致することになる。

マクロ経済現象を説明するためにはそれを個人の行動に還元する必要がある。そしてその個人の経済行動を説明するのがミクロ経済学である以上は、マクロ経済学はミクロ経済学の上部科学として構築されねばならない。それはまた、マクロ経済学はミクロ経済学と整合的、無矛盾でなくてはならないということも意味する。

このエッセイは直接的にマクロ経済学を論じる前に少しばかり現代マクロ経済学の基礎となっているミクロ経済学、とくに一般均衡理論について説明する。もちろんミクロ経済学を解説するといっても、その範囲は基本的にマクロ経済学の基礎としての部分に限っている。学術

的にいえば、それは六〇年代までの静学的一般均衡理論に限っているということだ。現代のミクロ経済学研究の最前線は動学的なゲーム理論を基礎としたものに変化してきており、それはそれ自体とても興味深いが、現在のところマクロ経済学には関係していないのでそれらについては解説しない。

エッセイの構成

まずマクロ経済学のミクロ経済学からの基礎付けを次章で概観し、その後はマクロ経済学の今日的発展をみてゆく。やや時間的な順序を考えて、ケインズ経済学の発展と衰退、そして現代マクロ経済学の基本モデルであるラムゼイのモデルと、それに伴っての合理的期待仮説についてみてゆく。ここでキーとなる人物はロバート・ルーカスである。第三章から第七章までは彼を中心にしたマクロ経済学の転換と発展を、その方法論レベルからの考察とともに概観することにする。

第八章以降は、いくつかのかなり独立したトピックを扱っているから、相互間にはあまり時

間的または論理的な関係はない。七章までの内容が現代経済学の方法論的な基本とするなら、これらはその応用として理解してもらいたい。